

日本印人研究

—山田正平の画と画論—

神野 雄 二

一 序

日本における印学の研究、印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立つた体系的な研究はまだ十分なされていないと言えない。本研究は、日本の印章や篆刻の歴史的、文化史的な解明を目的としており、総括的には日本の印学の体系化を目指したい。これは書学・書道史の対象としてだけでなく、美学・美術史、歴史考古学、文化史等その裨益するところは甚だ大きいと思われる。

これまで、日本や中国における印章や印人に興味を持ち、それへの史的考察や作品研究をテーマに据え論考を発表してきた。日本の印人の研究、主として高芙蓉（一七二二—一七八四）研究、並びに彼を祖とする芙蓉派の一系譜と目される、源惟良、小俣夔庵、福井端隱、山田寒山、山田正平等の事績の調査・研究と作品分析、そして印学の継承とその発展を探ることを問題としてきた。また、わが国の印人伝における唯一の専著と言える中井敬所の『日本印人伝』をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。篆刻の専家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究も併せて進めている。本稿はその一翼を担うものである。

さて山田正平（一八九九—一九六二）は、日本の篆刻の祖「印聖」と称される高芙蓉の系譜に連なる。古来「詩書画」三絶の文人活動は、文人必須の条件として詩・書・画に加えて篆刻を取り上げている。正平自身四絶の芸術境を目指し、篆刻芸術に命を賭した。正平の成し遂げた類まれな功績を考えるに、わが国における「印仙」と称してもよいだろう。

本稿ではこれまで殆ど触れられる事のなかった、正平の画とその画論について考究したい。

二 画作品と関係資料

一九二〇年に正平が描いた初期作品は、彼の画の成立を探る上で貴重なもので注目される。伝統的な日本画技法によるもので、彼の篆刻がそうであったように、まずは伝統の技法に拠った作品を手がけている。後、かなり早い時期に彼の独自の作風に変化していく。

最も彼が重視したのは、自然のスケッチから感得した実感でありここに重きを置いた。そして特色あるのは、篆刻家としての空間意識と鋭利な刃物で切り込むような線の直裁な表現であろう。それは、山田家に遺されたスケッチによる画面構成や線質からも確認できる。一九三七年（三九歳）の時に描かれた「一止道人自像」は、すでに正平の独自の画風によるもので、一九三九年（四一歳）に開催された第一回個展に出品された作品は、それが顕著に表現されている。

山田正平の画作品と関係資料を一覧にする。
図版は紙幅の関係上すべてを掲載できないが、これまでに刊行された以下の作品集で参照できる。

1、作品集・図録・雑誌特集号

山田正平の画が掲載された主な作品集・図録・雑誌特集号を列記し、彼の画や画論を言及する一助としたい。

○『山田正平先生遺作展特集号』（『書品』第一三五号 東洋書道協会 昭和三十七年十一月十五日）

・磯部草丘「一止道人を偲ぶ」

・松井如流「山田正平さん」

・伏見冲敬「山田正平先生略年譜」

・山田梅枝「父を憶う」

○『山田正平遺作展』（山田正平遺作展委員会 昭和三十九年八月十日 中央公論美術出版）

・中川一政「生きている文人趣味」

- ・堀口大学「巖々清時の人」
- ・武者小路実篤「逢えなかつた人」
- ・西川寧「くもの巣がかかっている」
- 『山田正平作品集』（山田喜美子編 木耳社 昭和五十一年十月十日）
 - ・中川一政「山田正平印譜」
 - ・西川寧「一止道人の印譜・序」
 - ・堀口大学「巖々清時の人（昭和三十九年）『山田正平遺作展図録』より再録
 - ・山田喜美子「あとがき」
- 佐藤耐雪「一止道人山田正平先生の書簡」（佐藤耐雪後援会 昭和五十四年一月十六日）
- 増補版『山田正平作品集』（山田喜美子編、木耳社、昭和五十九年七月二十日）
 - ・小木太法「山田正平論」
 - ・神野雄二「山田正平年譜」「山田正平研究文献目録」「山田家系図」
- 図録『山田寒山・正平展』（篆刻美術館 平成四年十一月六日）
 - ・神野雄二「山田寒山年譜」「山田正平年譜」「山田家系図」
- 特別企画「山田正平の世界」（『墨』第一五二号 芸術新聞社 平成十三年十月一日）
 - ・小木太法 評伝「正平交印録」
 - ・小池邦夫 作品論「正平のひとり遊び」
 - ・真鍋井蛙 作品論「篆刻と書とその時間」
 - ・小木太法 コラム「芸術は教わるものではない」
 - ・神野雄二「山田正平の刻字」
 - ・神野雄二 資料室「山田正平略年譜」
- 『月刊絵手紙』特集「山田正平文人画」第七一号（平成十三年十一月一日 日本絵手紙協会）
 - ・小池邦夫「山田正平文人画」
 - ・島田正治「正平先生の思い出」
 - ・小池邦夫「小池邦夫の課外授業、桜井定市さんの書簡より、山田正平先生の思い出」
- 『正平文人画』（山田潤平編、日本習字普及協会 平成十三年十一月六日）
 - ・中川一政「生きている文人趣味」

- ・小木太法「名印二顆」
- ・山田梅枝「父を語る」「あとがき」
- 図録『山田正平展』（篆刻美術館 平成十六年九月十七日）
 - ・神野雄二「山田正平年譜」「山田正平研究文献目録」「山田家系図」

2、画作品と関係資料の年譜

昭和五十一年秋、令夫人喜美子は『山田正平作品集』（木耳社前掲）の「あとがき」に次のように述べている。

正平は旅行が好きで、よく一緒にしましたが、いつも写生帖を肌身離さずもち歩き、旅で得た素描を、数回の個展に役立てたようでもあります。画を描く時はたいそう楽しそうでしたが、本業の印を刻る時はそれはそれは厳しい態度になって、心ゆくまで印稿を練り、一度で切りあげることもありましたが、時には何度も何度も刻り直しをくり返し、納得がいく作品ができる頃は、印材の丈が半分以下になっていることもしばしばでございました。それでも快心の作が仕上がり、印箋を前にして満足するような姿を見かける時は、ひとときの仕合せを味わったものでした。（略）

山田家に多くのスケッチブックが残されており、スケッチとはいえ、生き生きと写生されたもので、それが作品と称してもよいものとなっている。正平は、旅の途中、又折にふれ、富岡鉄斎・石濤・岡田米山人・中川一政・小川芋銭などの模写を試みている。

ここでは、山田正平の管見の及んだ画作品と画論に関係する資料の年譜を編んでおきたい。

凡例

一、丸括弧内は、西暦、年号、干支、年齢（数え年）の順に示した。

一、本年譜は、山田家収蔵品並びに左記文献、資料等により作成し、その出典表記に当っては次のように略記した。

・山田正平自筆年譜―「自」

○(一九三二・昭和六・辛未・三三)

小川芋銭の推薦による「寒山寺正平篆刻会」を行なう。この後四、五年続く。
〔芋銭翁の想い出〕

「水仙図」(紙本墨画)を画く。「生涯落魄惟耽酒客路蒼茫自詠詩」と題し、
款記に「辛未春日正平并題」とある。(山田家蔵)

○(一九三三・昭和八・癸酉・三五)

山田寒山の十七回忌を記念して寒山寺書画篆刻頒布会を催す。

「百合図」を画く。款記に「癸酉七月一止道人并題」とある。(山田寒山翁
十七回忌記念「寒山寺書画篆刻頒布規定」パンフレット、山田家蔵)

「夏山遊行之図」(掛幅・紙本墨画淡彩)を画く。款記に「癸酉八月一止道人製」とある。(パンフレット)

「墨竹図」(掛幅・紙本墨画)を画く。款記に「癸丑八月一止道人并題」とある。
(パンフレット)

令夫人きみ子作墨竹に賛をする。(パンフレット)

○(一九三四・昭和九・甲戌・三六)

「石榴図」(紙本淡彩)を画く。「子露佳人爾肌勻美女腮」と題し、款記に「甲
戌六月念六黎峯漁人偶未過醉餘及之正平製提籃并景」とある。(山田家蔵)

「山水図」(掛幅・紙本墨画)を画く。款記に「丙子四月正平戲墨」とある。(渡
辺秀英蔵)

磯部草丘と佐渡に遊ぶ。(ス)

〔越佐画冊〕成る。(木)

○(一九三七・昭和一二・丁丑・三九)

磯部草丘の「富士図」に「神州真面目」と題す。款記に「丁丑元旦正平題」とある。(山内正二蔵)

「一止道人自像」(掛幅・紙本墨画)を画く。款記に「丁丑六月自題」とある。
これは第一回個展に出品する。(山田家蔵・木二〇三頁)

画冊「無盡蔵」を画く。款記に「丁丑八月六日鏡下写畢」とある。(桜井定市蔵)

四

百草園にて水炭会を催す。(萩窪付近に住む磯部草丘他数人の画家と、月一回、出題の作画をもちより会したるもの。)(ス)

○(一九三八・昭和一三・戊寅・四〇)

小川芋銭を病床に見舞う。(ス)

第一回北越美術家「清盟会展覧会」に出品する。白木屋美術部5階ギャラリ
ー(北越出身者の美術家展)

小川芋銭の通夜に小川家を訪れる。(「芋銭翁の想い出」)

○(一九三九・昭和一四・己卯・四一)

第一回「一止道人個展」を銀座鳩居堂にて開催する。(主催水炭会、支援徳
富蘇峰・安田鞞彦)(毛筆履歴書)

○(一九四〇・昭和一五・庚辰・四二)

棟方志功が、山田家において「朱鯉魚」を画く。

○(一九四一・昭和一六・辛巳・四三)

「海福山最明寺全景」(掛幅・紙本墨画淡彩)を画く。款記に「昭和辛巳四月
浪華客中正平写」とある。(山田家蔵・木一七三頁)

○(一九四二・昭和一七・壬午・四四)

油彩自画像を描く(山田家蔵)(正平油彩画は二点山田家に遺されている。
伊東に遊び、水墨画「鯉魚帰路」など画く。(木、ス)

○(一九四四・昭和一九・甲申・四六)

第二回正平作品展を銀座鳩居堂にて開催する。

「八仙人」(掛幅)を画く。款記に「甲申十一月正平写并景」とある。(第二
回正平個展写真集)

「十六羅漢」(掛幅・紙本淡彩)を画く。「神通妙用」と題し、款記に「甲申
十一月一止敬写」とある。(山田家蔵・木一七六頁)

○(一九四七・昭和二二・丁亥・四九)

「八仙図」(掛幅・紙本)を画く。款記に「丁亥秋日一止製」とある。(山田家蔵)
 芋銭翁旧居を訪ね、牛久沼附近のスケッチをする。(ス)

○(一九四八・昭和二三・戊子・五〇)

第三回「山田正平水墨画個人展」を東京銀座松坂屋美術部にて開催する。

○(一九五〇・昭和二五・庚寅・五二)

「水滴図」(紙本・墨画淡彩)を画く。款記に「一止道人庚寅試毫」とある。(これには、大鹿卓々蒼々亭と松下英磨による画賛がある。)(山田家蔵)

○(一九五二・昭和二七・壬辰・五四)

冬、心会に参加する。中川一政に貰い受けた柿の写生あり。(同会は金冬心の詩を読む会で、この前後数年にわたり、中川一政宅で開かれた。池田古日、真田但馬、中川一政、山田正平、国安芳雄、嵯峨寛、保多孝三らが会員。)(ス)
 富岡鉄斎作「古仏龕図」を模写する。(ス)

○(一九五六・昭和三一・丙申・五八)

「長嶋北彩」を執筆する。(『篆刻講義ノート』)

○(一九五七・昭和三一・丁酉・五九)

磯部草丘著句集「氷炭」の序文を執筆する。(洪柿図書刊行会、昭和三十一年四月十日)

「壺・玉葱図」(掛幅、紙本墨画淡彩)を画く。「吉福」と題し、款記に「丁酉歳旦一止試毫」とある。(木一五九頁)

○(一九五八・昭和二三・戊戌・六〇)

「画讚の書きかた」を執筆する。(松井如流編「條幅・扁額の研究」二玄社、昭和三十三年三月)

「大雅堂と南画」を執筆する。(『南画研究』一一七、中央公論美術出版、昭和三十三年九月)

○(一九五九・昭和三四・己亥・六一)

「壺柿図」を画く。「清楽」と題し、款記に「己亥歳旦一止試毫」とある。(山田家蔵作品写真)

○(一九六〇・昭和三五・庚子・六二)

「急須蓮根橋図」(掛幅・紙本墨画淡彩)を画く。「寿康」と題し、款記に「庚子歳旦正平試毫」とある。(木一四九頁)

喜美子夫人と共に九州の桜島・阿蘇・別府などに遊ぶ。(ス)
 大分県中津市の自性寺にて池大雅の作品を鑑賞、模写する。(ス)

○(一九六一・昭和三六・辛丑・六三)

「柿・靈芝図」を画く。「美意延年」と題し、款記に「辛丑歳旦正平試毫」とある。(山田家蔵作品写真による)

喜美子夫人と共に北海道に遊ぶ。(ス)

○(一九六二・昭和三七・壬寅・六四)

第三次訪中日本書道団団長(秘書長香川峯雲、団員佐藤祐豪・殿村藍田・今井凌雪)として出発する。(自)

訪中時の写生がある。(ス)
 手帖に、五月七日から三十日までの日記がある。(山田家蔵)

病氣帰国のため、団員と別れ香港に向う。(『書道』九一三、泰東書道院出版部、昭和三十八年三月)

香港より空路帰国する。(『書道』九一三、前掲)
 東京警察病院に入院する。(木)

三 画論

山田正平には、画に関して縷々述べた画論が見られる。その中から、特に正平の考え方が顕著にあらわれていると思われるものを抄録してみる。そして正

平の文章を追いながら、正平の求めた画境を探ってみたい。

彼は晩年佐藤耐雪^②や桜井定一^③と交流を持ち、多くの書簡を送っている。中に芸術論が散見できる。かつて、そのいくらかを翻刻した。これらを併せて彼の画に対する姿勢や画論を考察する。

南画とは何であろう。南画の始祖は王摩詰か、摩詰は官人で詩人、牧谿も雪舟も僧である。また北画に対して南画と言うところに何かがある筈である。牧谿、雪舟は南画といわぬかもしれぬが、水墨画を描いたところは通じたものもあり、玉洲の琳派まで南画にとり入れる系列法にしたがえば、両者を適時借用に及んで差し支えないかもしれぬ。ともかく山水方滋とか、林泉の気とか、胸中山水とか、院体北画にない別の宗旨が南画精神らしい。むずかしい。

「大雅堂と南画」(『南画研究』前掲)

知識。勿論重んずべきであるが、書、画は物識りの詰め合はせではない。芸術の世界は別に在る。時たま私に画法を問ひたいと言う人があるが、その時の答はいつも同じである。絵は書法で殆ど推せる。人の絵を模倣するより直ちに自然に就いて対して学びとることより自家の形を創り出しなさいと。世間に在る画法を読むこれも無益ではない。しかし作って自得するのが、ホントである。人の目で見ただけの型を表面だけ模倣した様なものはなくもがなである。大人の型通りの絵より子供の絵の幼稚であるが、時に感興を覚へるのは純真、画境に遊んで居るからであらう。芋銭翁に時々絵の御話を聴いたことを想ひ出して忘れ難いことが色々あるが、何よりも自分の感興に真実であれと云ふ一条には教へられるところが深かった。

「画法寸感」(『篆刻講義ノート』^④)

佐藤耐雪に宛てた書簡を七通掲載する。(不明字は□とした。読解に便なるを考え、適宜句読点を付した。)

○佐藤書簡①(昭和三十三年七月十五日)

文人画の本旨はやはり伝神に在り。それにはやはり形似の城も徹して洞察して、減筆は繁を経過しての減筆こそ望ましく、数筆をかねたる一筆。

六

○佐藤書簡②(昭和三十四年五月七日)

御手紙を拝見しながら、御返しも出来す甚失礼致して居りました。印影と畫の小包御受けして、只今寸感を陳べようと存じます。妄評不当これ亦作品の如くその時の感想なれば、時を経て確評となるか否か定め難し。大凡作品は出来た時に自ら会心と否とは知り得る。十中の八九まで。余の分は暫時保存して熟観せば、取捨また自ら決し得。御申越しに因て大凡の順位とは致し置きしも、格段と等差あるに非ず。

百事大吉の墨画、小生とし尤も好ましく。墨色もよく。興行きもあり。題字の位置その心意気も画に溶け込み居る処あり。強いて難を拾えば印少し大きい。若し吉福の○印を用ゆるとせばいまま少し小さいか、或は一分位字の方へ寄せるか致したし。

次二山水仙境春長俊領、上部は氣力充ちてよろしと存じます。游印なき方よし。題字も引きしめて耐雪写位にしては如何、チト散漫なり。江南春雨写生スケッチ風にて軽く、その意味よりすれば捨て難し。水上よく舟浮びあり。題字の位置むしろ右方上部にひきしめて、江南とは多支那人の云ふ言端なれば、別に工夫して并題は不用。むしろ瞰取の場所にても書きては如何かと云ふのは、スケッチ風なれば、并題など仰々しいより軽くさりげない方適當かと存ず。

春山早行、題字も画と相応して先づよし。早春残雪。残雪とあれどこの場合文字に残雪とするよし。画となれば残雪を画にして、残雪とコトワリ書さず。別に感興を増すよう文字を附したら。游印の位置若し押すなら右の方へ。

箇の画少し達者過ぎて余味に乏し。

書も画も願はしきものは余韻氣品なり。上手、達者概念的は忌むところ。清白、氣分簡よりよし。泉字は□力の作を摘録するの意なれば、清白なる文字別二誰の語句と云ふものにも考えられざれば、泉字は一寸不適當ならずや。清白の字も、特に氣張りたることもなし、単に号位にしては自然かと存ず。

郵情心趣の分はチト余白空疎なり。やはり画とし不充分的の処あるならんか。忘評多謝

兼字ヨク字引きにより工夫ありたし。

昭和三四年、印これはこの様な体はウント工夫して、しかも卒意の味こそよけれ。ウント工夫すると云つても、ツマリ単純なものは尤も精神の純粹を要すと云ふこと。甘梅するよりむしろ卒意なれ。

右匆、

山田正平

五月七日

耐雪様

○佐藤書簡③（昭和三十四年六月七日）

情墨墨一味五彩を兼ねを忘れぬことに致し居り信じ居り候。筆墨深沈にして始めて賞鑑に入る。○を四角にしても立体を平面にあつかつても、兎に角自己の真実を表現することこそ我が制作なり。徒らの乱塗乱抹は目を掩はしむる耳。此頃流行の非具象派としてホンモノに近いものと偽物とあり。その別れは真と実なり。その真も実も表現の芸、芸なれば手と心と表裏一体は云ふ迄もなし。東洋の山水画はむづかしい。南画の手法による依様のものは現代には已に適用せぬ。今の人が今の山水画を作る甚だ難事業なり。風景画はよくあれど所謂東洋山水画の伝統を今に開くこれ難し。

○佐藤書簡④（昭和三十四年七月十四日）

拝復。この處色々混雑して方々へ御返事も出来ず失禮して居ります。

今日小間、別紙御作の印、に就き所感申述べました。印をやり出したのですからこの方少し進展せられては如何。絵の方も従つて展開と存じ候。文人画の本旨はやはり伝神ニ在り、それにはやはり形似の域も徹して洞察して減筆は繁を経過して、能減筆こそ望ましく。数筆をかねたる一筆。

「ふじ」誰も描くが自分の観たふじこれこそ画なり。太山木、幹不安定。自賛

の玉堂富貴は牡丹のこと、并題はなき方よろし。あやめは位置あしく、不安定。左右ツメル。守拙の印をとる位に「印もなき方この場合よろしからんか」あじ魚素朴の筆意稍親しみを感じたれど、その物の個性が見えず。十枚二十枚とウント写生して、その上独自の解釈をして絵にする。そしてやつとマツイながら自分らしいものが生れる。そんな態度でやってみては。

山田正平

七月十四

耐雪様

私の絵に対しての考えは書篆刻に対すと同じ。よく物象を観じて真を促え形よりも神仙をと願ふのです。文人画は私はその態度なのです。

○佐藤書簡⑤（昭和三十四年九月一〇日）

半分位の大きさに。適格に物象を立体的に観じ悟り、そして墨を惜しみ筆を減じ。或はその反対にうんと墨を馳し筆を馳せても。つまりスケッチ風の浅い一面でなく、自分は斯く観ると云ふ所を筆に創作するのだから。それにはやはり物象を描くタンレン工夫が必要であろう。筆がなければ墨の濃淡の真味が味解出来ないと、乱塗乱抹に了る。大雅曰く、一点も染めざる所尤も難しと。勿々の画。生きたる余白は一筆一点の筆墨が醸し出す独自の世界であろう。この頃の抽象派と雖も平面描写派も大宇宙の活気骨格を忘れては意味ないことせう。画はやはり一つの芸道。単に一片の気力だけでは成り立たず。苦心慘憺経営工夫ありて、それを経て僅かに万一を達し得らる、か。決して挫折してはならない。あせつてはならぬ。徐ろに古人の跡を鑑賞玩味して学び取り、形の模倣に了らず。我真意を創造することを第一、それに徹して行ふこと。

○佐藤書簡⑥（昭和三十四年十二月十九日）

処理の妙味を欠き、尤も使用には注意し適宜の場合に限るが如し。近世簡

略上に使用は別義ならんか。

この處色々多忙のことあつて甚失礼。別紙は四、五日来懸案の印稿、少しは御参考と相成るか同封致します。形のみを終始せば物なし。よく筆結構など玩索、形骸を離れ自己の心境はなつて来て居る様ですから、大いに自信を以て御精進下さい。古典をふまえ現代を超出して。

絵の方も大略見ました。大分墨色も筆意も落着きを見せて来られた様二思ふ。八大とか白石とか先覚の妙處を参酌學びとること大いに結構。彼等は東洋のデントウをやはり見につけてその時代に傑出せるもの、何か特殊のその作家独自の處、極單に言へば破格の處あるも、これは今申す古典のうらつけあれば自分法となり賞鑑二入るなり。それを單に形だけの摸仿に了り徒らに悪達者になれば、具眼者の世の嘲笑受ける耳。飽く迄大切なるは、自己の信実自己の目。自分の歌をうたふこと。この一点なくしては芸といひ難し。この度のうち大根など私はスキです。菊など慎重の写生甚好ましい態度なれど、これが八大白石の如く一つの自己の構図自分の増減省略が出来ればと。これは然し私にもなかくです。いつも同じこと申して繰り返しなり。申し上ぐる意志十の一も竭難く甚もどかしく。

師走 十九日 夜

山田正平

耐雪様

○佐藤書簡⑦（昭和三十五年二月十九日）

絵の方も拝見。但望むらくは余り早く物にせずゆつくり構成実感第一、拙を繁を厭はず。そして更二減と嚴と、そんなことで数多くせず、詩を画くつもりで精進して見られたら。兎二角楽しんで苦しんでやつて居るうち上達疑いもなし。欣羨切望。

これらから読み取れることは、正平は伝統的な画や画論に飽き足らず、より現代的な考えを持つていたことが分かる。これは、正平が古来の伝統的手法を

重んじつつも現代に生きた作品を志向していたからにはかならない。

正平の画や画論に新規性が見られるのは彼のこのような考えからであろう。

彼は画賛に苦心をしたが、彼の端的な文章が残されている。松井如流編「條幅・扁額の研究」（前掲）に掲載された「画讚の書きかた」である。

いささか長文であるが、ここに引用しておく。

画讚について書けということであるが、それには先ず画に対する私の態度から語らねばならない。昔は文人画というと、蘭竹四君子から、樹木山水と順を追って習い、それを一応學びおえれば足りるといふ考えが一般であつたようであるが、現在私たちが画をかくにはこうした法にはよらない。ただちに自分の眼で自然を見、物象を写生して、自からのものとして構成—創作する。これは決して私、個人の態度ではなく、今日の画家の一般的な態度であることはいまでもない。旧来行われた法も一つの確実な方途ではあるうが、今われわれのとつている態度は、これより自由であるとともに、また苦難の道であるといえよう。

そこで、落款の入れ方、題賛の位置をどうするかという点にたち至つても、やはり、單純に一種の法を定めてそれに依るといふことはできないのである。そもそも法といふものは、その人によつてその法が立つものである。一般に通ずる法といふものは無いと思う。古人のいわゆる法なるものが、必ずしも法として成立するものではないのである。

実作に當つてみればすぐわかることであるが、何処に落款をいれ、何処に印を押し、どこに讚をするかといふことは、常に作品が教えてくれる。作品自らが、それを要求しているのである。つまり画と讚とはそれほど切つても切れない契合があるのであつて、その無いのは画でも書でもないといつてもいいであろう。

古人の作品を見ると、ある場合には不思議なところに落款や讚をしたものがある。これは実にその人、その場合にのみ許され、また成功する独特の法なのである。だから古人にあるからといつてそれに倣うのは愚なことである。例えば玉堂琴士の画などには、ときに非常に破格の題字をしたものがある。それが何とも言えない趣を成しているのであつて、誰か他の人が、それ

に做つたとしてもこうはいかない。何と云うか、思いきり踏み込んだ位置のとり方をしているのである。

これを裏返して考へるならば、約束された位置に約束の言葉を書くなどということは、むしろしない方がよいであろう。讀によつて一種の趣をかもし出せばこそ、その必要があるのであつて、そのような働きもなく、むしろ趣を妨げるようなものは、本来文人画とは無縁なものではあるまいか。古人もこのことについては、「俚鄙なる匠習よりも、よろしく没字碑に学ぶを是と爲すべし」と言つて痛烈にやつつけている。

結局、画が出来上がつて、それに落款をする場合、また印だけ押す場合、二字でも一句でもこれに題賛する場合、ともにそれは画の延長であり、どういふ意味の文字が書いてあるかということには関係なしに、そこに筆で書いてあるその字の線の動きが、画の言わんとしていることを更にうけ継いで表現していなければならぬものと思う。これが画題の作用の一つの大きな分野であることは確かである。

この一文には、「今われわれのとつている態度はより自由である。」とか「法というものは、その人によつてその法が立つ。」などは、正平の篆刻論にも通じる考へであり、彼が実作主義また古人の考へを尊重しながらも、独自の手法を常に探つていたことが見て取れ興味深い。

四 山田正平が影響を受けた画人

正平の画を考へるにあたり、益を受けた重要な人物として、池大雅・富岡鉄斎・小川芋銭・呉昌碩がまず挙げられる。これは、筆者は以前、正平が東京学芸大学で指導した学生に対して、授業内容に関してアンケートを依頼し考察を加えた。⁵⁾ これから正平は授業中に、池大雅・富岡鉄斎・小川芋銭・呉昌碩に關して色々語つていくことが明らかにできた。正平が草した文章を引きつづ、彼らへの人物観を見てみたい。まずは、呉昌碩であるが、正平自身が述べたものとして、「呉昌碩を訪ねる」(『好古』昭和十四年十一月)と「呉昌碩先生と先人寒山翁と私」(『書道』第五卷第十号、泰東書道院出版部、昭和十一年十月)に詳しい。いささか長文であるが、ここに引く。【内の引用は、『書道』に

よる。他は『好古』による。

私が、呉昌碩先生にお目にか、つたのは、岳父寒山の歿後、大正八年晩秋、河井笠廬先生に伴はれて渡支した時のことであつた。最初に翁を訪ねた時は、その日は少し薄曇りの日であつた。河井先生に伴はれて、日本人には殆んど行き合はない町々を迂曲してから狭い小路へ入り昌碩先生の門前に立つた。黒塗りの門扉が堅く閉ざされてゐる。これは要心の為めで、支那人の一寸した住宅はみなさうであつた。門を叩いて案内を乞うと左右に開かれ、其處は六七坪位の石畳みの空庭となつてゐて、それを圍んで、家があるのである。その空庭に面した右方の奥行き四間もあると思はれる部屋が應接室で、すぐ翁は出て來られた。まことに老婆さん然とした温容で、逸氣稜々の作風に似合はしからぬものであつた。

河井先生は如何にも愛情に満ちた握手をされ、久闊を叙する挨拶をされて、我々は卓を圍んで腰を下ろした。私は言葉が判らないので翁がまたしても小さな扁壺の鼻煙を袖から取り出しては絶えず指先きにつけて鼻孔へなすられるのを、物珍らしく眺めてゐた。いろいろ話のうちに、現在支那で所謂高德の隱者に書をよくする人の有無の質問に、翁は沈思甚だ久しくしてゐられたが、容易に名前が出て來さうになかつた。翁からの質問もいろいろあつたやうで、そのうちに日本人は何故に色彩の強きを好むかとか、藝道は、親子でも仕方のないものであるなどの話のあつたのを覚えてゐる。その日は應接間で面接しただけで歸つたが、その後耽單獨で度々行つて、こんどは書齋で仕事をされるのを見せて頂いたのはうれしい思ひ出である。薄暗い階段を靴のまゝで昇り、書齋へ案内された。書齋での翁は薄汚れたとしか思へぬ鼠色の長衣を着て下腹の邊を白い紐で縛つた無難作の風體で、卓子の傍には雑書や仕事に必要な雑道具が置いてある位で、極めて簡素なものであつた。千巻の書も、萬里の道も何の苦もなく頭の何處か、或は腹の隅にでも小さく畳み込まれてゐるらしい。卓子の上へ紙を展べ、立つて揮毫される。一枚出來ると「不好、不好」と愛嬌を言はれる。私が言語を知らぬので、大體筆談であつたが、時々草體で長々と書かれるのには一寸應酬に困つたものである。御訪ねする毎に應接間には翁自作の巨幅が掛け更へてあつて、其れは坊間に見る所と異り、如何にも會心の作らしく、自ら楽しむといふ翁らしい心境が窺へる様な氣がした。

【吳翁は特に梅と菊を好んで描いた様である。篆を作るの法を以て之を写し、造化を師とするとか、梅を写して世を出づるの姿を取り、菊を写して傲霜の骨あるを取るとか、篆刻にも等しくこの性情が窺へる屈強不羈な梅の姿幽寂遺世の思ある菊の香が感じられる。】

私の訪ねた頃は依囑者門に市をなすの繁昌で、随つて多作の弊も伴つたやうなことも聞き、また歿前一二年に滅燭一輝で面白いものが出来たとも聞いてゐる。兵燹に追はれ他郷に流寓し、自ら酸寒の一尉と称し奔放の情熱を詩書畫篆刻に傾注した時代の話が懐まれる。

兎に角翁は近代支那掉尾の大家であつた。石鼓文を學んであの換骨脱胎、前代未曾有の刻風、實に山を移し流れを逆にもする痛快無比な變化清新を、目前に示された事には、我々古へを尋ぬる者、藝にたづさはる者の終生の鞭撻であり、深く鑑とせねばならぬことである。

如何に伍翁の氣魄の雄偉なるか左に印刻と題する長篇の一部を摘録して見よう。

【天下幾人學秦漢。但素形似成疲癯。我性疏濶類野鶴。不受束縛彫鑄中。少時學劍未嘗試。輒暇寸鐵驅蚊龍。不知何者他為正變。自我作古空群雄。】

小川芋錢とは生涯に亘つて交流を持ち続け益を受けている。

かつて小川芋錢が山田正平に宛てた書簡を取り上げ、正平の小川芋錢への思いを探った。それは、「山田正平研究（一）」山田正平をめぐる人々とその影響【「書道芸術」第四卷第五号、通卷第二三号、前掲】と「山田正平研究（二）」山田正平をめぐる人々とその影響【「書道芸術」第四卷第六号、通卷第二四号、前掲】である。

正平と芋錢の画風は大きく相違するが、自然観察や、芸術に向かう姿勢に影響を受けている。正平と芋錢の関係を簡条的に纏めておきたい。

○小川芋錢の來訪をうける。（芋錢翁の想い出）

○小川芋錢より葉書を受け取る。（この後芋錢より、書簡十三通、葉書五通を受け取る。これは山田家に現存する。）

○小川芋錢の推薦による「寒山寺正平篆刻会」を行なう。この後四・五年続く。（芋錢翁の想い出）

○芋錢翁旧居を訪ね、牛久沼附近のスケッチをする。（ス）

○小川芋錢を病床に見舞う。（ス）

○小川芋錢の通夜に小川家を訪れる。（芋錢翁の想い出）

次に正平が益を受けた人物への彼による人物観ともいえるものがある。本稿では文献・資料の紹介に留める。

まず鉄斎であるが、彼が草した「鉄斎と篆刻」【「三彩」第三八号、美術出版社、昭和二十五年一月】に詳しい。

大雅については、「大雅堂と南画」【「南画研究」一一七】に詳しい。

また直接的ではないが、会津八一の東洋画への考え方の益も受けている。それは「会津先生と私」【「書品」七九号、東洋書道協会、昭和三十二年四月】と「会津先生と篆刻」（渾斎同人編「渾斎 秋艸道人」川村徳助発行、求龍堂、昭和四十三年十一月）に詳しい。

更に正平は磯部草丘（一八九七—一九六七）や、錢瘦鉄（一八九七—一九六七）の影響が見られる。これは別稿で述べる。

五 正平画への評価

山田正平の画への評価はどのようなものであろうか。同時代人の言説からみてみたい。まずは生前交流のあつた中川一政を取り上げる。

正平さんのふところに日本紙のスケッチ帖があるのを私は知っていたが、生前私は正平さんの絵をみたことはないのである。山田正平追悼号で五、六枚見たのはじめてである。そして宛然、中国人の絵だと思った。何より俗気がない。そして刀法がきいているところは矢張り見逃せない。私は死んでいる文人趣味はすきでない。しかし、正平さんは生きている。

中川一政「生きてゐる文人趣味」(『山田正平遺作展』
中央公論美術出版、昭和三十九年八月)

続いて 中央公論社の編集長を務めた松下秀麿である。

戦後、市井に酒の乏しかったころ、小倉理化学研究所所長の小倉千磨が、甘藷から盛んに純良な酒をつくつたので、我党の士は阿佐谷の彼の家に暇をつくつては集り飲んだ。そのある日、黄眼先生を首座に山田正平、大鹿卓、それに小倉所長と私が会して、したたかに、純良焼酎の、アルコール分四十二、三度位から最高五十五度位のを傾けた。大酔の後、古歌などうたい、やがて散歩かたがたこんどは聴雪廬にうかがつた。携えた大瓶をここで空けると次は筆硯である。先生は「そえ子、そえ子、紙だ」へはい、はい、ちよつとおまちと」と台所でごちそうの準備中の奥さんは、この荒武者の闖入にてんてこ舞いをされた。二三面の硯にむかい、筆筒から先生のとつておきの筆をとりだして、おのおの天馬空を行く底の書面を書きなぐつた。印も「それ、それ」と先生が投げ出されるものをひろつては、西冷印社製の印泥をべたべたつけて、おした。すると、一止道人はその泥をたつぷり指先きにつけて、こそこそと次の間の本のあいだに隠れ、裾をまくり上げて大切な一物を塗つている。これは一大事、気でも狂つたのではないかとぞいてみると、何のことはない、感慨の詩書の末尾に、こそこそいわせて押捺しているのである。道人曰く「一世一度の試、これこそ稀に印史に伝えられる亀頭印である。僕も生涯に一たびは試みたいと思つたが、今日これを実験しえて、何の幸かこれに過ぎん」と。先生はじめころがつて笑い呆け、平素の一止さんを知るものにとつては、晴天の霹靂ともいふべき天真爛漫の一風景であつた。聴雪廬の床の柱にいつもかかつていた片聯の「応無往処而生其心」は、その時、私が句を選んで、道人が書したものである。

これも戦後間もなくのことであるが、山田さんと二人で中川一政氏自慢の金冬心を見に行こうということになつて、阿佐谷から永福町まで歩いて行つた。長巻の書作品、墨梅図もあつたかと思う。それに冬心先生銘のある硯など五、六件を見せて貰つた。食いつくように眺め入つていた山田さんは「さすがのものですな」と会得するところがあつたようだ。帰りに、阿佐谷の

大通りにたつた一軒やつてゐるソバ屋で、行列をして、やつとソバを啖べ(国が亡びても芸術はのこるといふことを、このごろしみじみと感じますね。しかし書にしても、篆刻にしても、中国の亜流でしかない日本のものはどうでしょう。大死一番大いにやらなきあー」と述べたことを忘れ難い。そういう意味では山田さんは真に芸術の鬼であつた。鬼であつたが故に、世間に示す作品は数少なかつたのであろう。その厳しい制作態度は、およそ世渡りにはふさわしくなかつた。その厳しさを最後まで崩さなかつたのは、一面からみると、きみ子夫人の内助の功に帰さねばならない。

いま「万象院永楽一止居士」と化した山田さんは、現世のあらゆるものから解放されて、小川芋銭や河井仙郎や会津八一、それに呉昌碩や鄧完白、金冬心、さらにはセザンヌ、ゴッホなどと、かつて白から画いた「八僊図」のように、時間のない漠々たる天上で、アツハハハハと急調子で供笑してゐるであらう。合掌。

松下秀麿「一止道人追懐」(『古酒』第八冊、昭和三十七年十月)

また松下秀麿は筆者宛の書簡において、

小川芋銭は印人にとって、芸術人として最も影響を受けた作家と私は考える。芋銭には畏敬を以て対している。長男の時か潤平君の時か今は明瞭でないが、五月の節句に朱筆よる鐘鬼の図を芋銭より贈られている。中川一政氏の芸術人としての境涯に共鳴し、その画□に同一の究極点を期したものがあつたと述べてゐる。

これら諸家の言説より正平の画に対する所感が見て取れ、概してその評価は高いと言える。が、彼の正当な評価や日本画史での位置づけはまだこれからといえよう。まずは彼の絵画を主体とした作品集が編まれることが望まれる。

六 結

本稿では、山田正平の画と画論に関する文献・資料を精査し、正平の新たな功績の一端を明らかにした。また正平の画における初期資料の提示をし、同資

料の価値を指摘した。

正平は篆刻家であることは論を俟たないが、画においてもこの時期を画する画人の一人に数えてよいと思われる。古今東西の画に学び、最も日本人らしい風趣ある簡素な画風を確立した。その独自性は古今独歩といえる。

確かに正平の画は東洋古来の伝統を重んじてはいるが、決してそれにしぼられるのではない。篆刻家としての刀意あるもので、彼の独自性は線と画面構成に見られる。画論は洋の東西を問わず融合されたもので、彼独自の美学に基づくものといえる。

昭和三十九年七月に中央公論画廊にて開催された第一回「山田正平遺作展」の図録の「趣旨」を、正平に私淑した篆刻家の保多孝三が起草した。正平の画に対する内容をよく表していると思われるので、ここに引く。

趣旨

一 止道人山田正平先生。

その書は篆隸の蒼古に出でて真草また後世の嫵媚を厭ひ、その画は朱倉の風骨に傾倒して兼ねて木米・鐵斎の高逸を摂り、さらにその印に至つては呉趙を透過して直ちに丁敬身の古格に参するものがありました。

先生少きより跌宕不羈、中年城西の地に棲遲して蹤迹を韜晦し、藝境いよいよ高きを加へましたが、昭和三十七年書道使節に長として中国に渡り、途中病を得て遂に起たず、藝苑傾に寂莫を想はしめるものがありました。

先生歿して二載、ここに遺墨・遺作を蒐めて江湖の清鑑に供し、いささか在天の藝魂を慰めんとするものであります。

昭和三十九年七月

印壇の風雲児と言われた正平の生涯は、探れば探るほど興味が尽きない。日本崎人伝中の人物として推奨したい。伴高蹊の『近世崎人伝』の再統編を編むとすれば、山田寒山と同様正平の名もしかと記さるべきであろう。彼の性格は、豪放磊落、名利を求めずその生涯は小説にさえなりうると思はれる。飄逸の風流人正平の芸術は、篆刻が第一、書が第二、画が第三、詩が第四そしてなによりも人物が面白い。

今後彼のスケッチ帳や文献・資料を更に精査しその実態に迫りたい。

本稿執筆に際し山田潤平氏、梅枝氏、正氏からご配慮ご指導を頂いた。ここに感謝の意を表する。

(註)

(1) 拙稿「山田正平をめぐる人々とその影響小川芋銭①②」(『書道芸術』四一五・四一六、九月号・十一月号、日本美術出版、昭和六十一年九月・十一月)に詳しい。

(2) 佐藤書簡は、山田正平に私淑した佐藤耐雪に正平が宛てた手紙である。後年耐雪は、「一止道人山田正平先生の書簡」(佐藤耐雪後援会、昭和五十四年一月)として刊行した。

(3) 桜井書簡は、山田正平に私淑した桜井定市に正平が宛てた手紙である。筆者は、「山田正平研究(二)」―桜井定市宛書簡―(『修美』第一四巻通巻四十九号、平成七年一月)として翻刻した。

(4) 篆刻講義ノートは、山田正平が東京学芸大学で講じた講義の下調べのノートを、書道科同窓会視心会の有志が纏めたもので、これまで二回刊行されている。目次を挙げる。

○「山田正平先生篆刻講義ノート」(東京学芸大学書道科同窓会視心会、昭和三十八年六月)

・田辺萬平「序」・伊東寿「遺稿に学ぶ」・鈴木武夫「山田先生と吉福の雅印」・吉田繁「思ひ出の断片」

○「回顧山田正平―東京学芸大学における教育者としての側面―付篆刻講義ノート(復刻)」(東京学芸大学書道科視心会、平成十六年七月)

(十一月三日、東京学芸大学において、「山田正平先生を語る」シンポジウムが開催された。(シンポジスト 小木太夫、杉本稔香、塚本虚齋、益子素州、神野大光)

・藏元訓征「こあいさつ 感化―山田正平展に寄せて―」・特別展示山田正平展 展示資料・山田正平先生を語るシンポジウム・山田正平先生篆刻講義ノート(復刻)・山田正平年譜・山石切誠「あとがき」

(5) 正平は昭和二十八年から三十七年まで東京学芸大学の学生に対して、「篆書・篆刻」を講じた。筆者は、その受講生に対してアンケートを行い集計・分析し、一九七九年に東京学芸大学専攻科終了論文として纏めた。後、これを基に「山田正平における教育的側面―東京学芸大学における篆書篆刻講義を通して―」(全日本書写書道教育研究会、北海道大会研究集録、全書研北海道大会事務局、昭和五十七年八月)として執筆した。



図2 図1の画讃



図1 山水図（部分）・1920年

本年二〇二二年は、山田正平没後五十年に当たっている。記念の展覧会が東京鳩居堂画廊で、一〇月二十三日から二十八日まで開催された。
 本年二〇二二年十月二十九日、東京学芸大学時代の恩師小木太法先生が死去された。先生は私の研究におけるライフワークとなった「日本の篆刻家研究」中でも山田正平のことをご教示下さった。先生は正平を最も尊敬し、深く理解されていた。山田正平の顕彰は、小木先生の数多くのご業績の中でも特筆されよう。
 本研究は、平成二十四年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「日本の篆刻に関する基礎的研究」（課題番号KM100-2152014400）による研究成果の一部である。

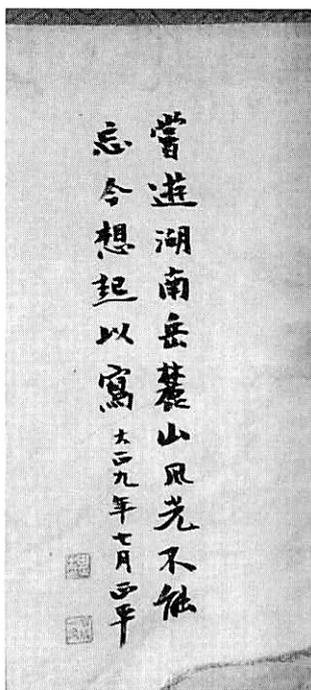


図6 図5の画讃



図5 山水図・1920年

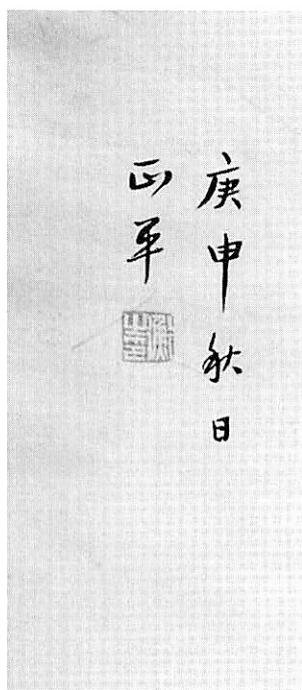


図4 図3の画讃

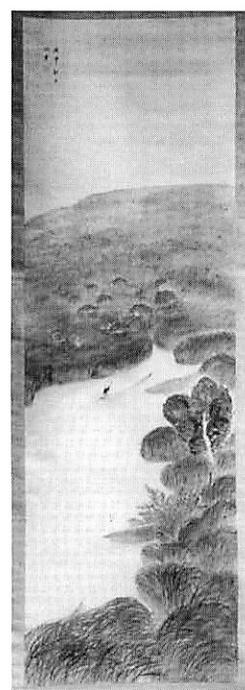


図3 山水図・1920年